

研究ノート

近現代文芸の中の広告（3）
— 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 —

水 野 由多加

Advertising in modern literature (3);
Examples of Japanese advertising in modern literature

Yutaka MIZUNO

Abstract

The Japanese word “Koukoku,” which means the translation and coinage of advertising, was used after the Meiji Era instead of “Hirome,” which just means spread out. The author conducted an extensive literature review to document examples of Koukoku in the literature following the Meiji Era, and describes them in this paper. This effort may prepare the way for a deeper investigation in the form of media studies into the definition and meaning of advertising in Japanese society and culture.

Keywords: literary text, literature, advertising, advertisement, discourse, sociolinguistics

抄 録

広告という言葉は Advertising の翻訳造語として、それまでの広目に代わって明治期以降日本社会で使用される。筆者は、今回、明治期以降の文芸の中にその用例を狩猟、観察する。この作業は今後のより深い広告に関する社会的文化的な定義と意味についてのメディア論的な検討を準備することとなる。

キーワード：文芸、広告、言説、社会言語研究

はじめに

前々稿（拙稿「近現代文芸の中の広告（1）— 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 —」『関西大学社会学部紀要』第46巻第1号）、前稿（拙稿「近現代文芸の中の広告（2）— 明治期以降の文学作品中の言説渉猟 —」『関西大学社会学部紀要』第47巻第1号）に引き続き、明治期以降の文芸作品を資料として用いる社会学的広告研究として、「社会の中の言説」に広告現象がいかに扱われ、意味づけられたかを見る、そのための素材収集と集成を以下行う。

1. 泉鏡花「金時計」(1893、M26)に見る「遺失物を尋ねる高札(こうさつ)」

広告

一 拙者昨夕散歩の際此(この)辺一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候間御拾取の上御届け下され候御方(おんかた)へは御礼として金百円呈上可仕候(つかまつるべくそろ)

月 日

あーさー、へいげん

これ相州西鎌倉長谷(はせ)村の片辺(かたほとり)に壮麗なる西洋館の門前に、今朝より建てる広告標なり。時は三伏(さんぷく)盛夏の候、聚(あつまり)読む者堵(と)のごとし。

2. 石川啄木「閑天地」(1905、M.38)に見る「公言・喧伝」

知らぬ人は、私は大食をして胃病に相成り候ふと広告するが如しとも見るならん。

3. 国木田独歩「富岡先生」(1905、M.38)に見る「新聞の訃報広告(黒粹)」

婚礼も目出度(めでた)く済んだ。田舎(いなか)は秋晴拭(ぬぐ)うが如く、校長細川繁の庭では姉様冠(あねさまかぶり)の花嫁中腰になって張物をしている。

さて富岡先生は十一月の末終(つい)にこの世を辞して何国(なにくに)は名物男一人を失なった。東京の大新聞二三種に黒粹(くろわく)二十行ばかりの大きな広告が出て門人高山文輔、親戚(しんせき)細川繁、友人野上子爵等の名がずらり並んだ。

同国の者はこの広告を見て「先生到頭死んだか」と直ぐ點頭(うなず)いたが新聞を見る多数は、何人なればかくも大きな広告を出すのかと怪むものもあり、全く気のつかぬ者もあり。

然しこの広告が富岡先生のこの世に放った最後の一喝(いっかつ)で不平満腹の先生がせめてもの遣悶(こころやり)を知人(ちじん)に由(よ)って洩(も)らされたのである。心ある同国人の二三はこれを見て泣いた。

4. 和辻哲郎「霊的本能主義」(1907、M.40)に見る「公に見せる」

「自己」を真価以上に広告するは虚栄、卑怯

5. 田山花袋「田舎教師」(1909、M.42)に見る「チラシ、リーフレット」と「張り出されたビラ」

矢張骨の字の号をつけた一人で——これは文学などは余り解る方ではなく、同じ夥伴におつき合につけて貰った組であるが、かれの兄が行田町に一つしか無い印刷業を遣って居て、其前を通ると、硝子戸の入口に、行田印刷所と書いたインキに汚れた大きい招牌が懸って居て、舊式な手刷が一臺、例の大きなハネを巻返し繰返し動いて居るのが見える。広告の引札や名刺が主で、時には郡役所警察署の簡単な報告などを頼まれて刷ることもあるが、それは極めて稀であった。棚に並べたケイソウの活字も少なかった。文選も植字も印刷も主が皆な一人で遣った。日曜日などには其弟が汚れた筒袖を着て、手刷臺の前に立って、刷れた紙を翻して居るのを常に見懸けた。(後略)

遼陽占領の祭で、町では先程から提灯行列が幾度となく賑やかに通った。何處の家の軒にも鎮守の提灯が並んでつけてあって、国旗が闇にもそれと見える。二三日前から今日占領の祭をするという広告を彼方此方に張出したので、近在からも提灯行列の群が幾組となく遣って来た。荻生さんは危篤の報を得て、其の国旗と提灯の雑沓の中うを、人を突退けるようにして飛んで来た。一時間ほど前には、清三は其の行列の万歳の声を聞いて、「今日は遼陽占領の祭だね、」と言って、その賑やかな声に耳を傾けて居た……。

今、また其の行列が通る。万歳を唱える声が賑やかに聞える。やがて暇を告げた医師は、丁度其處に酸漿提灯を篠竹の先につけた一群の行列が、子供や若者に取巻かれてわいく(繰り返し)通って行くのに逢った。

「万歳！日本帝国万歳！」

6. 新渡戸稲造「アテもなく上京する婦人の末路」(1916、T.5)に見る「多くの人に知らしめようとする意図のある言行」

この婦人たちは、初めて田舎から出て来た婦人のために、万事の世話をしてくれますが、

世話をしたからといって手数料などは取りません。しかし、旅費の不足を補ってやるとか、金力でどうこうするというものではありません。本来の目的は、都会生活に慣れて田舎からポツと出て来た婦人が、悪者の誘惑に陥らないように救済してやろうというのです。

私がこういうことをいったからとて、決してこれを広告しようとするものではありません。また仮に広告したとしても、それは自分の利益になるのではなく、却って世間一般の利益になるのですから、広告だといわれても構いません。

7. 長田幹彦「紅屋の娘」(1916、T.5)に見る「京阪電車の電飾広告」

御幸町(ごこうまち)の通(とほ)りを真直(まつすぐ)に下(さが)って、三条(でう)の通(とほ)りへ出(で)ると彼女(かのちよ)はそこを東(ひがし)へ折(お)れて、やがて三条(でう)の大橋(おおはし)のうえ、来懸(きかゝ)った。雪(ゆき)はもう橋板(はしいた)や勾欄(こうらん)のうへに白(しろ)く積(つ)もって、咽(むせ)ぶやうな瀬(せ)の音(おと)と一緒に(しよ)に河原(かはら)から吹(ふ)きあげて来(く)る風(かぜ)は針(はり)のやうに鋭(するど)く、木屋町(きやまち)へ妓(をんな)を送(おく)つてゆく俵(くるま)が二三臺(だい)勢(いきほい)よく走(はし)つていつたあとは、向(むか)ふ岸(きし)の大津(おおつ)行(ゆ)きの電車(でんしゃ)の広告(くわうこく)電燈(でんとう)だけが徒(いたづ)らに明(あか)るく、河岸(かし)につゝ席貸(せきか)しの冷たい燈影(とうえい)をみてみると傘(かさ)をもつ手(て)がづきづき疼(うず)くほど凍(こゝ)えて来(き)た。

8. 与謝野晶子「趣味ある女の手紙の書き方」(1916、T.5)に見る「梅田駅付近にある継はぎの着物のような広告看板」

旅(たび)にて書(か)く手紙(てがみ)。

汽車(きしや)の一夜(や)、大阪(おほさか)の一日(じつ)、和歌(わか)の浦(うら)の宿(やど)、夜船(よふね)此処(ここ)へ来(き)ましてからの二日(か)、数(かぞ)えますとこれだけなのですが、東京停車場(とうきやうていしやぢやう)の薄暗(うすぐら)い歩廊(ほらう)を後(あと)にしました時(とき)のことを、今(いま)の心持(こゝろもち)では少(すくな)くとも一月前(ひとつきまへ)のこのように思(おも)われます。明日(あす)になり、明後日(あさつて)になれば一月(ひとつき)が二

月(ふたつき)になり、三月(つき)にも思われるのでしょうか。汽車嫌(きじやぎらひ)の私(わたし)が身(み)の置(お)き苦(ぐる)しい箱(はこ)の中(なか)を、やと出(で)て来(き)たかと思(おも)いますと、それまで心身共(しんしんとも)によなよなになった半病人(はんびやうにん)に過(す)ぎませんでした私(わたし)が、反対(はんたい)に活々(いきく)とした人(ひと)になりましてね、其時(そのとき)だけは、あの広告看板(くわうこくかんばん)が都会(とくわい)の入口(いりくち)を継(つぎ)はぎの着物(きもの)のようにして居(い)る梅田駅付近(うめだえきふきん)の街(まち)などをも、唯(た)だ珍(めづら)しいと眺(なが)めて通(とほ)りました。

9. 河上肇「貧乏物語」(1917、T.6)に見る「ロンドンの政治演説会動員を広告する楽隊」

さればロイド・ジョージのこの地に入らんとするの報一たび伝わるや、同地の新聞紙は一斉に筆を整えて獐猛(どうもう)に彼の攻撃を開始し「自称国賊(セルフコンフェッスド・エネミー)きたらんとす」「売国奴(トレーター)ロイド・ジョージ侵入せんとす」などという挑発的文字をもって盛んに市民の反感を扇動し、広告隊は終日市中を練り歩いて「国王、政府及びチャンバーレン君を防衛するがため」忠実なるすべての市民は、ロイド・ジョージの演説会場たるタウン・ホール(市公会堂)に押し寄すべしなど触れ回るといふ勢いで、彼いまだきたらざるに殺気はすでに市内にみなぎった。ここにおいてか警察部長(チーフコンステーブル)は万一をおもんばかり、彼に向かってせつに集会を中止せんことを求めたけれども、元来彼ロイド・ジョージは、自ら反(かえ)りみて縮(なお)からずんば褐寛博(かつかんぱく)といえども吾(われ)憚(おそれ)ざらんや、自ら反みて縮くんば千万人といえども吾往(ゆ)かんという流儀の豪傑なれば、なんじょうかかる事にひるむべき。いよいよ予定の日、予定の場所で大演説会を開くこととなった。

10. スウキフト「ガリバー旅行記」(1909、M.42.)に見る「口頭でのふれ」

私(わたし)は此(この)宿屋(やどや)で一番(ばん)大(お、)きな五十間(けん)もある室(へや)の食卓(テーブル)の上(うへ)に載(の)せられた。小さいお守(もり)さんは此(この)食卓(テーブル)の傍(わき)の低(ひく)い臺(だい)の上(うへ)に立(た)って、私(わたし)の世話(せわ)をしたり、私(わたし)の藝當(げいとう)を指揮(さしづ)したりして居(い)た。主人(しゅじん)は混雑(こんざつ)す

るのを避(さ)ける為(た)めに、見物人(けんぶつにん)を一組(くみ)三十人(にん)づゝに限(かぎ)った。私(わたし)の藝當(げいとう)はお守(もり)さんの命令(めいれい)で、食卓(テーブル)の上(うへ)を歩(ある)き乍(なが)ら、私(わたし)の知(し)って居(い)る此国(このくに)の言葉(ことば)の範圍(はんい)で、お守(もり)さんの質問(しつもん)に対(たい)して大(おほ)きな声(こえ)で答(こた)える。見物人(けんぶつにん)の方(ほう)を回顧(ふりかえ)て一寸(ちよつと)稽首(おじぎ)をし、「皆(みな)さん、能(よ)くお出(い)でになりました、」と挨拶(あいさつ)をして、私(わたし)の教(おそ)はった二三の話(はなし)をする。杯(さかずき)の代(かわ)りに管(くだ)に酒(さけ)を入(い)れたのを持(も)ち上(あ)げて見物人(けんぶつにん)の健康(けんこう)を祝(しゆく)して、其(そ)れを飲(の)む。劍(けん)を抜(ぬ)いて、劍術(けんじゆつ)使(つか)ひを真似(まね)て振(ふ)り廻(まわ)す。お守(もり)さんのよこした藁(わら)の切(きれ)で、子供(こども)の時(とき)に習(なら)った槍術(そうじゆつ)を使(つか)うなど云(い)う様(よう)な藝(げい)であった、之(これ)を一日(いちにち)に十二組(くみ)の見物人(けんぶつにん)に見(み)せ、同(おな)じ事(こと)を幾回(いくかい)も繰返(くりか)えさせられたのだから、私は其(その)疲(つか)れと煩悶(はんもん)とで半(なか)ば死(し)んだ者(もの)のようになって仕舞(しま)った。主人(しゆじん)は自分(じぶん)の利益(りえき)から打算(ださん)して、お守(もり)さん以外(いがい)の人(ひと)には私(わたし)の身體(からだ)を触(さわ)らせなかった。而(そ)して危険(きけん)を防(ふせ)ぐ為(た)めに見物人(けんぶつにん)の腰懸(こしかけ)を遠(とお)くへ離(はな)して、私(わたし)へ手(て)の届(とど)かない處(ところ)に置(お)いた。悪戯(いたずら)の学校生徒(がっこうせいと)が居(い)て、私(わたし)の頭(あたま)を目掛(めが)けて檜(かし)の実(み)を投(な)げ付(つ)けた。其(そ)れがすんでのこと私(わたし)に当(あ)たる處(ところ)であった。若(も)し其(そ)れが当(あ)たったら、其(その)実(み)は南瓜(かぼちゃ)位(くらい)あったから、私(わたし)の頭(あたま)は確(たしか)に碎(くだ)かれて居(い)たろう。此(この)若(わか)い悪戯者(いたずら)は横面(よこつら)をししたゝか打(う)たれて、室(へや)の外(そと)へ突(つ)き出(だ)された。私(わたし)も之(こ)れで少(すこ)しは胸(むね)が収(おさ)まった。

主人(しゆじん)は再(ふた)び次(つぎ)の市日(いちび)に私(わたし)を連(つ)れてくると広告(かうこか)して、家(いへ)に帰(かへ)った。最初(さいしよ)の旅

行(りよかう)に、私(わたし)は酷(ひど)く疲(つ)れて、八時間(はちじかん)許(ばかり)も見物人(けんぶつにん)を面白(おもしろ)がらせた後(のち)は、もう立(た)つ事(こと)も出来(でき)なかった。

11. ロマン・ロラン「ジャン・クリストフ」(1923、T.12)に見る「新聞で世に広く知られること」

知らず知らずにその先鞭をつけたのは、オリヴィエだった。

オリヴィエは自分のためにはなんらの奔走もしなかったし、ひどく広告をきらっていて、黒死病(ペスト)をでも避けるように新聞記者を避けていたけれど、事が自分の友に関係するときには、他に尽くすべき義務があると考えていた。世のやさしい母親、正直な中流婦人、りっぱな人妻は、そのやくざな息子(むすこ)へ何かある特典を得させることができるならば、自分の身体を売ってもいいと思っているが、オリヴィエもちょうどそれに似ていた。

オリヴィエは諸雑誌に筆を執っていたし、多くの批評家や文芸愛好家と接触していたので、おりがあればかならずクリストフの噂(うわさ)をしていた。そしてしばらく前から、自分の言葉が聞きいれられてるのを見て我ながら驚いた。文学界や社交界に広まってゆく、一種の好奇の動きを、一種の妙な風説を、彼は周囲に感知した。その起源はなんであったろうか、イギリスやドイツでクリストフの作品が最近演奏されたのにたいする、新聞紙の多少の反響であったろうか。いや、はっきりした原因があるのではなさそうだった。それは、パリーの空気を吸っていて、サン・ジャック塔の气象台よりもなおよく、どういう風が起りかけていて明日はどうなるということを、前日から知ってるような、見張りを事としての精神の人々には、よくわかってる現象の一つだった。電気の震動が通ってるこの神経質な大都会のうちには、眼に見えない光栄の潮流があり、露はな名声に先立つ隠れたる名声があり、客間の漠然たる風評があり、時至れば広告的論説となって現われてくる、イリヤード以上のもの出づがあり、新しい偶像の名前をもっとも堅い鼓膜にも響き通らせる、太鼓の太音があるのである。それにまた時とするとその大らっぱは、賞賛の対称たる当人のもっとも親しいもっともよい友人らを逃げ出させることすらある。けれどその責任は友人らのほうにもある。

12. 宇野浩二「質屋の主人」(1925、T.14)に見る「するのが難しい質屋の広告」と「為にする言辞」

彼はまた首の後に手を廻しながら、「いや、全くですな。しかし、商売をやらないと、……この方は、さし詰め食つて行かなければならない道理ですから、無論一所懸命にはやるつもりですが……」と弁解するやうに云つた。それから、先に述べた質屋開業の広告難のことを話したのである。

そこで私は彼の尻馬に乗つて、妙なことを人に進める訳ではないが、大体彼はさういふ善良な男であるから、若し万一に入用のことがあつたら安心して彼の店を訪問されんことを、読者諸君に私から改めて紹介する訳である。

尤もこの文章は決して質屋の広告のために書いたのではない。勘違ひをされては迷惑するのである。文学青年といふと一概に嫌なものやうに聞えるが、世にはかういふいい意味の、愛すべき文学青年もあるといふことを、私は嘗て一度彼のことをこの雑誌に書いた因縁で、同じ『質屋の小僧』の後日談として、斯くの如く書いたまでである。

13. 山本有三「広告制限」(1925、T.14)に見る「新聞広告にかける費用」

(前略) 広告費というものは雑誌経営の上では少なからぬ費目であり、現綱領などよりも遙に多く支払われてゐるのである。(中略) 極端な例をいへばこの文藝春秋なぞは初めの頃ちよとした広告を出したっきりで、今では一行の広告もしないのに、それでも二萬も三萬も売れてゐる。こんなことをいうと新聞社からは怒られるかもしれないが、どうも近頃の雑誌は広告費を使い過ぎる。ある種の雑誌は年に十萬圓も二十萬圓も広告費を使ってゐるが勿体ないことである。雑誌業者もそれは良く知つてゐるのであるが、競争雑誌との対抗上止むを得ずやつてゐるものが多いようである。それならお互い話し合つたらよさそうなものであるが、どちらも弱みを見せまいとしてそんなことは切り出さない。内実は苦しいのであるが、相手が五段抜き広告なら、こちらは七段抜き、向こうが半面なら、こちらは一面大のを載せるといったようなことをやつてゐる。

14. 柳田国男「どら猫観察」(1926、T.15)に見る「自ら行く喧伝」

ヴェネチヤの水の都で、ダニエの旅館に久しく遊んで居た頃、番頭が何処かのおばあさ

んに話して居るのを聴くと、此宿の地下室はどら猫の多く居るので有名だそうである。妙な事を看板にしたもので、ホテルで呉れる小冊子にも、此事が興味多く記してある。御希望ならば御案内をしますとも書いて居る。ヴェネチヤの穴倉ならば、大抵どの位湿気て居るかも想像し得られるが、その暗い処に何十代以来とも知らず、野獣の如き猫が棲息して、其数幾何なるかも分らぬという。しかも給仕人の話に依れば、毎日一定の食物を口元の処に置いて遣るのだそうで、丸々の野ら猫でも無いが、兎に角にもう家畜のうちでは無い。

私は此話を聴いたとき、日本の客商売の家に、招き猫と称して座蒲団の上などに、猫の土偶を置く風習を考え出しておかしかった。物々しいダニエリの広告ぶりは、いつ頃から始まったか知らぬが、古くあるホテルで穴倉の中に、猫の居ないものが果して幾らあろうか。食物ばかりは其辺に散らばって、誰も可愛がって呉れる者が無ければ、結局は地下室にでも入って匿れて繁殖をするより他は無。主人を恨み世をはかなんで、山林に遁世しようという祇王祇女の如き猫が、有ろう道理は無いからである。

15. 川端康成「孤兒の感情」(1927、S.2)に見る「サンドイッチマンもしくはちんどん屋」

街は年の暮れである。赤いシルクハットを冠って広告屋が歩いてゐる。かき餅を焼く匂いが微かに漂って来る。醤油の焦げる匂いで、私は五年見ない故郷の風景をふと思ひ浮かべた。

16. 海野十三「三角形の恐怖」(1927、S.2)に見る「チンドン屋」

其の時でした。不意に横丁から笛と太鼓と鉦(しょう)との騒々(そうぞう)しい破れかえるような音響が私の耳を敲(たた)きました。と早や私の身体を前に押し出すようにして私の前に躍進したのは、近所の寄席の番組がわりでも触れて歩くらしい広告屋の爺さんで、背中には赤インキで染めたビラを負い腹に釣った大きな太鼓の前には三角の広告旗を沢山つけ、背中の中のうしろからのび上った竿の先に身体を全体を蔽(おお)うかのように拡げてとりつけられた紅白だんがらの花傘の上にまで、一面に赤い三角旗を樹(た)てまわしていました。

17. 村山籌子「川へ落ちた玉ねぎさん」(1927、S.2)に見る「人探しの新聞広告」

朝になつたので、ジャガイモ・ホテルの主人のジャガイモさんは、地下室へ、パンと紅茶を銀のおぼんにのつけて、来て見ますと、昨日の晩に、とまつた筈(はず)の玉ねぎさんの姿は、影も形もありません。玉ねぎさんの持つて来たトランクが、のこつてゐるだけでした。

ジャガイモさんは、大変に心配して、早速新聞社へ行つて、次のやうな広告を出してもらひました。

「キノフノパン、私ノウチノ地下室ニトマツタ玉ネギサンガ、行方不明ニナリマシタ。オ心アタリノ方ハ私ノトコロマデオ知ラセ下サイ。知ラセテ下サツタ方ニハ、オ礼ヲ一円サシアゲマス。ジャガイモ・ホテル。」

すると、その日の夕方、ひよつくり、昨日ゐなくなつた玉ねぎさんが帰つて来ました。

ジャガイモさんは、

「まあ、よく帰つて下さいました。どんなに心配したか知れませんが。」と言ひましたので、玉ねぎさんは、どんなに、ベッドから川のなかへ落ちたか、そして、どんなに、あわてておよいで岸に這(は)ひ上つたか、そして、岸の上で、新聞の広告をよんだかを話しました。すると、ジャガイモさんは頭をかいて申しました。

「それは、まことにお気の毒なことを致しました。その代り、今晚は、とても、すばらしいお部屋があいてゐますから、泊つて下さい。」と申しました。

玉ねぎさんは笑ひながら言ひました。

「あ、あ、僕がもう一日おそく、こゝへ来たなら、昨日のやうな、ひどい目には会はずだよ。」と申しました。

けれども、不思議なことに、玉ねぎさんは、ひどく、このジャガイモ・ホテルが気に入つてしまつて、一生涯、この、ジャガイモ・ホテルの番頭さんになつて、ジャガイモさんと一しよに住むことになりました。

それですから皆さん、あなた方のめしあがる洋食で、ジャガイモのついてゐるお皿には、きつと、玉ねぎがついてゐるでせう。それは、こんなわけです。

その翌(あく)る日から、ホテルの看板が、こんな風にかき変へられました。

「ジャガイモ・玉ネギ・ホテル」と。

18. アーサー・コナン・ドイル「赤毛連盟」(1929、S.4)に見る「該当者へ呼びかけ申し出を募る新聞広告」

「覚えておこう、ワトソン。」ホームズは私の方を向いた。「細々と説明するのは損だ、とね。『未知なるものはすべて偉大なりと思われる。』……僕の評判もあまり大したものでもないが、あまり正直にしゃべっていると、やがては地に落ちてしまう。ところでウィルソンさん、広告は見つけられましたか？」

「ええ、見つけましたとも。」ウィルソン氏は太く赤い指を中ほどの欄に下ろした。「これです。これが事の始まりだったのです。自分自身でご覧になって下さい、ホームズさん。」私は新聞を受け取り、次のように読み上げた。

赤毛連盟に告ぐ——米国ペンシルヴァニア州レバノンの故イズイーキア・ホプキンズ氏の遺志に基づき、今、ただ名目上の尽力をするだけで週四ポンド支給される権利を持つ連盟員に、欠員が生じたことを通知する。赤髪にして心身ともに健全な二十一歳以上の男性は誰でも資格あり。月曜日、十一時、フリート街、ポープス・コート七番地、当連盟事務所内のダンカン・ロスに直接申し込まれたし。

私は、この奇怪極まる広告を二度読み返した。
「……意味がさっぱりわからん！」口をついて出たのは、こんな叫びだった。

19. 岡倉覚三「茶の本」(1929、S.4)に見る「アピール」

男も女も何ゆえにかほど自己を広告したいのか。奴隷制度の昔に起源する一種の本能に過ぎないのではないか。

20. 岸田國士「田卷安里のコーヒー」(1930、S.5)に見る「自分の努力や姿勢を主張する自家広告」

友人たちは、ひそかに語り合つた。
——田卷は、やつぱり、文学が好きなんだよ。「文学を愛すること」を愛するなんて批評は少し酷だ。

—なるほど、「文学を愛する事」を愛する奴のなかには、おれの判断によると、田卷がコーヒーを好むといふやうに、一種の現代的迷信乃至は流行心理に囚はれ、単純な見栄と自己陶醉を含む、もつともユウモラスな稚気の持主もあるにはあるが、彼の場合は、必ずしも、さうとばかりはいへないよ。

—なに、それだけさ。その証拠に、あいつの書くものは、ことごとく、自分が如何に主義のために献身的であり、文学のために忠実であるかを吹聴したものとばかりぢやないか。あんな作品は、自家広告以外、何の役に立つと思ふ？

—自家広告とはいへないさ。さういふ邪念はないよ。

—そんなら、自己紹介でもいい。「おれはかういふものだ」といふことを書くだけなら、昔から、自然主義の亜流がやつて来たことだ。もつと謙そんな態度でやつて来たことだ。

—謙そんなでもなからう。

—兎に角あの男を、さういふ風に見るのは勝手だが、あゝいふ傾向の文学を文学と呼ぶ以上、あれはやつぱり、一種の理想主義的文学と見るべきだらう。

—いや、おれがいはたいのは、そんなイズムについてぢやないんだ。あの男についてなんだ。人間としての田卷安里は、今日の文学者の一つの型を代表してゐる、この型は、必ずしも理想主義者の中にばかりあるのではない。おい野添、お前も、幾分、この部類だぞ！

—馬鹿いへ！

21. 種田山頭火「行乞 三八九日記」(1930、S.5)に見る「広告人形」「広告燈」

- ・ 酔へば人がなつかしうなつて出てゆく
- 師走夕暮、広告人形がうごく
- 久しぶりに話してゐる雨となつた
- どしやぶり、正月の餅もらうてもどる
- (中略)
- あんな夢を見たけさのほがらか
- けさも一りん開いた梅のしづけさ
- 鐘が鳴る師走の鐘が鳴りわたる
- ・ 街は師走の広告燈の明滅

・ 仲よい夫婦で大きな荷物
飾窓の御馳走のうつくしいことよ
うつくしう飾られた児を見せにくる
寒い風の広告人形がよろめく
朝日まぶしい餅をいたゞく
(後略)

22. 牧逸馬「ロウモン街の自殺ホテル」(1931、S.6)に見る「街中の視線を集め話題となり、名前が世に知られること」

個人的に出かけたのだが、見張りに行った巡査まで自殺したとなると、騒ぎは大きい。巴里の心臓に幽霊ホテル、自殺室などと新聞は書き立てる。幾ら屍骸を検べても、暴力の痕跡は元より、何らの怪しい点は発見されないのである。やはり、その部屋に漂っている悪霊の雰囲気、そこに眠っている者の意思を捉えて、死へまで導くものであろうということになった。二、三の新聞は、最も首肯され得る適当な説明を募って懸賞金を掲げたりして、巴里は勿論、全仏蘭西からもう大陸のセンセーションになっていた。今までは、近処の人のほか知る者もなかったロウモン街のオテル・ダムステルダムが、一躍巴里中の視線を集めて、その当座、巴里の話題といえ、この自殺室のことで持切りだった。広告にはなったが、有名になればなるほど泊る人はばったりなくなって、商売は上ったりである。

23. 梶井久「臨終まで」(1932、S.7)に見る「ポストに入れられる郵便物状のもの」

耳の敏い事は驚く程で、手紙や号外のはいった音は直ぐ聞きつけて取って呉れとか、広告がはいってもソレ手紙と云う調子です。兎に角お友達から来る手紙を待ちに待った様子で有りました。こんな訳で、内証言は一つも言えませんから、私は医師の宅まで出かけて本当の容態を聴こうと思いました。これは余程思切った事で、若し医師が駄目と言われたら何としようと思いましたが、それでも聞いておく必要は大いにあると思って、決心して診察室へはいました。医師の言われるには、まだ足に浮腫が来ていないようだから大丈夫だが、若し浮腫がくればもう永くは持たないと言うお話で、一度よく脚を見てあげたいのだが、病人が気にするだろうと思ってそれが出来にくい、然しいずれは浮腫(うき)だすだろうと言われました。これを聴いた私は、千尋の絶壁からつき落された心持でした。

もうすっかり覚悟しなければ成らなくなりました。ああ仕方がない、もうこの上は何でも欲しがるものを皆やりましょう、そして心残りの無いよう看護してやりましょうと思いました。

24. エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人事件」(1932、S.7)に見る「犯人を呼び寄せる新聞広告」

「捕獲。——ボルネオ種のたいそう大きい黄褐色の猩々一匹。本月——日早朝〔殺人事件のあった朝〕、ボア・ド・ブローニュにて。所有者（マルタ島船舶の船員なりと判明した）は、自己の所有なることを十分に証明し、その捕獲および保管に要した若干の費用を支払われるならば、その動物を受け取ることができる。郭外（フォーブール）サン・ジェルマン——街——番地四階へ来訪されたし」

「どうしてその男が船員で、マルタ島船舶の乗組員だということが、君にわかったかね？」と私は尋ねた。

「僕にはわかっていないのだ」とデュパンが言った。「僕もたしかには知らないのさ。が、ここにリボンのきれっぱしがある。この形や、脂じみているところなどから見ると、明らかにあの水夫たちの好んでやる長い辮髪（べんぱつ）を結わせるのに使っていたものだよ。そのうえ、この結び方は船乗り以外の者にはめったに結わえないものだし、またマルタ人独得のものなんだ。僕はこのリボンを避雷針の下で拾ったんだ。被害者のどちらかのものであるはずはない。ところで、もしこのリボンから僕がそのフランス人をマルタ島船舶の乗組員だと推理したことがまちがっているとしてもだ、広告にああ書いても少しも差支えはないよ。もしまちがっているなら、彼はただ僕が何かの事情で考え違いをしたのだと思って、それについて詮議（せんぎ）したりなどしないだろう。ところが、もしそれが当たっているなら、大きな利益が得られるというものだ。そのフランス人は、殺人には無関係だが、それを知っているので、当然、その広告に応ずることを——猩々を受け取りに来ることを——ためらうだろう。彼はこう考えるだろう、——『己（おれ）には罪はない。己は貧乏だ。己の猩々は少し値打ちのものだ、——己のような身分の者には、あれだけでりっぱな財産なんだ、——危険だなんてくだらん懸念のために、あれをなくしてたまるものかい？ あれはいますぐ己の手に入るところにあるのだ。あの凶行の場所からずっと離れた——ボア・ド・ブローニュで見つかったんだ。知恵もない畜生があんなことをしようと

は、どうして思われよう？ 警察は途方に暮れているのだ。——少しの手がかりもつかめないのだ。あの獣のやったことを探り出したに似たところで、己があの人殺しを知っていることの証拠は挙げられまいし、また知っていたからって己を罪に巻きこむことはできない。ことに、己のことは、わかっているのだ。広告主は己をあゝの獣の所有者だと言っている。彼がどのくらいのところまで知っているのか、己にはわからない。己のものだとわかっている、あんな大きな値打ちの持物をもらいに行かなかつたら、少なくとも狸々に嫌疑がかりやすくなるだろう。己にでも狸々にでも注意をひくということは利口なことじゃない。広告に応じて、狸々をもらってきて、この事件が鎮まってしまうまで、あいつを隠しておくことにしよう』というふうだね」

このとき、階段をのぼってくる足音が聞えた。

25. チューホフ「頸の上のアンナ」(1933、S.8)に見る「舞踏会への誘いを行う新聞広告」

そのうちに冬になった。まだ降誕祭までに大分間のあるうちから地方新聞には、来る十二月廿九日貴族会館に於て冬季舞踏例会「相催され候」という広告が出ていた。

26. 武田麟太郎「釜ヶ崎」(1934、S.9)に見る「張り紙(ビラ)」

雨はあがつた、しかし、陽の光は射さなかつた。——小説家は表へ出ると、昨夜の出来事や、逢つた人々を思ひ出さうとしたのだが、何だか、ほんやりとしか浮びあがらなかつた。電車の狭いガード下で、そこは誰彼となしに小便すると見え、コンクリートは湿気で壊れ、白い黴(かび)やうのものがひろがつてゐるが、烈しい臭気に彼も亦、そのことに気がついて、小口貸金手軽に御用立てます、と云ふ広告を読みながら、排泄するのであつた。そこを抜けると無料宿泊所があり、そのあたりには、午前中からもう夜の宿の心配をしなければならぬ浮浪者たちが、いつでも事務員が出て来て受附けるならば、すぐ列を作つてならべるやうに支度をして——蹲うずくまつて考へたり、立話をわいわいやつてゐた。小説家は、そのあたりが葱畑(ねぎばたけ)であつた時のことを、思ひ出してゐた。——

27. 村井政善「蕎麦の味と食い方問題」(1934、S.9)に見る「出前のざる蕎麦の薬味の小皿の上の屋号が印刷された紙」

また出前に困るということにもなりましようが、その出前を取った場合も第一不愉快のことが多いのです。雨の日などは器の上に雨のかかっていることもあり、薬味の小皿の上に広告式の小紙をかぶせては来るも、その紙もぬれているという次第です。

28. 大阪圭吉「石堀幽霊」(1935、S.10)に見る「チンドン屋の撒き投げ込むピラ・チラシ」

さて、一方足跡の番人を仰せつかった新米の蜂須賀巡査は、奉職してから初めての殺人事件に、もう一番手柄を立てたかと思うと、内心少からぬ満足で、こうなるとそろそろ商売は可愛らしく、後手を組んで盛んに合点しながら、足跡の線をあちらへブラリこちらへブラリと歩き廻っていた。

こうして研究してみると、足跡などもなかなか面白い。例えば――、蜂須賀巡査は勝手口の小門の近くに屈み込んで、庭下駄の跡に踏みつけられた一枚の桃色の散ちらし広告を見ながら考えた。――例えば、この広告ピラは、小門の方を向いた庭下駄の跡に踏みつけられているのだから、庭下駄の主が庭の植込から出て来て、この小門を脱け出て行く際に踏みつけられたものに違いない。――ふむ。カフェーの広告だな。ルパン……ルパン？ はて、聞いたことのある名だぞ？……

何に気づいたのか、急に蜂須賀巡査は立ちあがった。そして額口に激しい困惑の色を浮かべながら、暫くじっと立止っていたが、やがて訊問をすまして台所へ出て来た女中のキミを見ると、歩みよって声をかけた。

「君。ちょっと訊くがね。この家へは、新聞や散(ちらし)広告は、どこから入れるかね？」

「え、新聞？」と彼女は体を起してエプロンで手を拭きながら「新聞は、その小門を開けて、台所(ここ)まで届けて呉れますわ。郵便もね。でも、広告などは、その小門を一寸開けて、そこから投げ込んで行きますが」

「成る程。有難う」

蜂須賀巡査は大きく頷いた。けれどもその顔色は見る見る蒼褪め、額口には一層激しい困惑の色を浮かべて今までの元気はどこへやら、下唇を堅く噛みしめながら、顫える指先で盛んに顛顛(こめかみ)のあたりをトントンと軽く叩きながら、塑像のように立竦(たちすく)んでしまった。

— 妙だ……つまりここから、散（ちらし）広告が投げこまれる……それから犯人が女を殺しに出かける途中で、投げこまれたこの広告を踏みつける……それでいいか？ それでいいのかな？……駄目駄目。サッパリ理窟が合わんぞ！ 蜂須賀巡査は頼（しき）りに苦吟しはじめた。

するとそこへ、取調べを終った司法主任の一行が、宏と実の双生児（ふたご）を引立てて意気揚々と出かけて来た。蜂須賀巡査は急にうろたえはじめた。そしてどぎまぎした調子で司法主任へ云った。

「待って下さい。ちょっと疑問があるんです」

「なんだって？」司法主任は乗り出した。「疑問？ 冗談じゃあない。随分ハッキリしてるぜ。鑑識課から電話があったんだ。兇器の柄の指紋と、秋森宏の指紋がピッタリ一致しているんだ！」

— 蜂須賀巡査は、手もなく引退（ひきさ）がった。

やがて一行は引揚げて行った。そして秋森家の双生児（ふたご）は殆んど決定的な犯人として警察署へ収容され、事件は一段の落着を見せはじめた。

ところが、虫がおさまらないのは蜂須賀巡査だ。夕方の交代時間が来て非番になると、相変らず悶々と考え続けながら秋森家へやって来た。そして勝手口の例の場所で、先刻（さっき）の女中に立会って貰うと、庭下駄の跡に踏みつけられた広告ビラの前へ屈み込んで、もう一度改めて考えはじめた。

— 「カフェー・ルパン」の広告ビラ。これは確かにあのチンドン屋の撒き捨てていったものに違いない。すると、この広告ビラが先に投げ込まれたのか？ それとも二人の犯人が先にここを通ったのか？……けれども目の前の事実はビラが先に投げ込まれて、その後から二人の犯人が出て来て、庭下駄で知らずにビラを踏みつけた、としか解釈出来ない。そうだ。この事実に間違いはない。すると……すると、チンドン屋は、犯人がこの小門を出て行く前に、つまり惨劇の起きるより先に、この門前を通ったことになる……それでいいか？ それでいいのかな？……駄目駄目。チンドン屋は、事件の後から通った筈だ。……まるで理窟になっとらん！

29. 九鬼周造「外来語所感」(1936、S.11)に見る「張り紙（ビラ）」

— 昨年の夏のことであった。夕方ぶらりと上野公園から根岸の方へ歩いて行ってみると「根岸盆踊」という広告が方々に貼ってあった。やがて広場に出ると囃子はやしのやぐらや

周囲の踊場が提燈ちょうちんや幕で美しく飾られていた。踊はまだ始まっていなかったが老若男女がかなり集まっていた。私には少年時代に父に伴われて有馬温泉の近在で見た盆踊のことが懐しく思い出された。するとすぐわきに「蠅取はえとりデー 七月二十日」という掲示がチラリと目についた。この貼紙一つで情調がすっかり破られてしまった。「デー」は如何いかにも醜悪である。沢瀉久孝おもだかひさたか博士をして「何デー」「何デー」「ナンデイ」「ナンデイ」「ナニヲ云ッテヤガルンデイ」、日の神の「日」という美しい言葉を持ちながら何を苦しんで「デー」などという紅毛の国のダミ言葉を使うのかと憤慨させるのも誠に道理がある。外来語は山紫水明の古都までも無遠慮に侵入している。平安朝このかた一千年の伝統をだらりの帯に染め出しているような京の舞妓まいこに「オープンでドライブおしやしたらどうぞす」などといわれると腹の底までくすぐったい感じがする。

30. 小津安二郎「車中も亦愉し」(1937、S.12)に見る「わざと褒めることを依頼された」

これは東北の三等列車の中。直ぐ前にすわつてゐる一人の青年が買つて来て包みをほどいたばかりの本を読んでゐる。顔の青白く神経質にみえる割に着物の着ごなしなど田舎者らしく、村では相当のインテリ青年が啄木を好み暇と小遣ひを都合して上京し、ドイツ映画を鑑賞し、うまい珈琲をのみ、帰りに新刊書を買つて来たとも思へる感じがいかにも好もしく、一体何を読んでゐるのか気をひかれたが、のぞきこむわけにもゆかず、そのうち幸ひトイレットに立つたので置いて行つた本の表題をみると、これはまた意外にも『小心恐怖症の治療』とある。近来心臓のみ強い人の多い世の中に、気の毒にもまた頼もしい青年ではあるまいか。僕も一読の必要があるが未だその機を得ない。(非広告)

31. 岩波茂雄「岩波文庫論」(1938、S.13)に見る

編集部より岩波文庫について語れとの話ですから、思いつくままを申し上げます。現在は文庫時代ともいってよいほど各種の廉価版が行なわれ、どこにおいても欲しいものが自由に求められることになっているが、今より十数年前は予約出版の円本が流行して一世を風靡したのである。この流行によって学芸が一般に普及した功績は認めねばならぬが、また一方、好ましくない影響も少なくなかった。特に編集、翻訳、普及の方法などにははなはだ遺憾の点のあったことはこぼむことは出来ない。この流行に刺激されて、学芸普及の

形式はかくありたいものだと小さい私の野心から生まれたものが岩波文庫である。岩波文庫を刊行するに際し、私が読書子に寄せた辞の

「近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇称する全集が其編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。更に分売を許さず読者を繫縛して数十冊を強ふるがごとき、果して其揚言する学芸開放の所以なりや。吾人は天下の名士の声に和して之を推挙するに躊躇するものである。」

という一節を読み直してみても、その激越なる口調に当時の流行に対しに私が反撥心を持ったかがわかる。良書を廉価にということは本屋として誰でも思いつくことであるが、私も学生時代に親しんだカッセル版、レクラム版のような便宜なものをつか出したいと志してきた矢先、ちょうど円本の流行はこの念願を実現する動因となったのである。

32. 加能作次郎「乳の匂い」(1941、S.16)に見る「公衆トイレ等の鏡面に刻まれた薬の名前」

店の片方の壁に、何かの薬の広告用の額鏡がかゝつてゐて、それに映つた自分の姿でそれと知つたのだが、風呂敷包みに手足が生えたともいほうか、何のことはない、亀が後脚に立つて蠢(うごめ)いてゐるやうだと、それを私に背負はせたお雪さん自身さへ、思ひ遣りなく手を拍(う)つて笑つたほどだつた。

33. 辰野隆「パリの散策」(1941、S.16)に見る「パリの広告禁止を言う警告掲示」と「日本の花柳病の新聞・雑誌の広告」

エッフェル塔や凱旋門の上から見下した初夏のパリの景色も見事だが、ノートル・ダム寺院のてっぺんに昇って、有名な中世紀の怪石像の間に自分の東洋的にグロテスクな面をならべながら、パリ全市を馬鹿にしたように見下すのも亦(また)なかなかに興が深い。

ノートル・ダムは絵や写真にもあるように、セーヌ河を隔てて斜めうしろから眺めた形が最も美しいようである。

パリの街をぶらりぶらりと歩いていると、往々、壁や塀に、大きく「禁広告(デファンス・ダフィシュ)、千八百何年の法規」と書いてあるのが目につく。或る日、ふと、そういう「禁広告」という文字の真下に、白いチョークで、何たる広告だ(ケル・アフィシュ)!

と、落書のあるのに気がついて、一寸面白いと思った。

落書で思い出すのは、パリに移る前にリヨン大学の聴講生として時々聴講に出かけた頃、大学の玄関に近い廊下に落書禁止の掲示板を見たことである。掲示板には、「学生諸君は文字或は図画を以て机、椅子、壁等を装飾せられざらんことを」と誌してあった。ところが、教室に入って見ると、落書は相当なものであった。たまたま僕の占めた上には、ナイフで丁寧に「ランドリユー万歳」と彫ってあった。ランドリユーというのは一九二〇年頃、フランス全土を慄えあがらせた殺人、強盗、強姦の犯人で、恰も僕がリヨンにいた頃、死刑に処せられたのであった。

凡そ日本ほど、正々堂々と花柳病の広告を新聞や雑誌に掲載する国はあるまい。これは殊に少年少女の教育の為に是非とも当局の三省を促したいものである。フランスの新聞雑誌には斯ういう広告は非常に稀れなように思われる。パリではこの種の広告は概して、街の共同便所内に限られている。「尿道専門（ヴォワ・ユリネール）、快癒迅速（ゲリゾン・ラピッド）、何々街何番地」と云ったような広告がべたべた貼ってある。ところが、時々、尿道専門何某という医者の名の下に、盗人比処に行くべからず（ヴォールル・エ・アレ・パ）なんて、落書がしてある。

34. 原民喜「二つの死」（1949、S.24）に見る「家庭教師やりますという新聞広告」

その秋、私は土地会社の周旋で中野駅附近の汚ないアパートの一室を借りたのだが、私から権利金を受取った先住者は押入に荷物を残したまま身柄だけ一時立退いたかと思ふと、時折その部屋に現れてはそこを足場に担ぎ屋の商ひをつづけてゐた。そのうち先方の都合がどうしても立退けなくなつたと諒解と解約を申込んで来た。私は中野打越にある、甥の下宿先に再び舞戻つて来た。それから私は新聞社に「求間独身英語家庭教師に応ず」といふ広告を依頼してみたり、数少ない知人を廻り歩いて部屋のことを哀願してみた。「いつになつたら引越してくれる」と甥は時々不機嫌さうに訊ねる、そのたびに私は多少心あたりがあるやうな返事をしなければならなかつた。この若い学生の甥は殆ど毎日友人を連れて来ては部屋に寝そべつてゐた。

「あの時は愉快だつたね、隣の家にはピカ（原子爆弾）で死にかかりの人間があるのに、こちらではみんな楽器を持寄つて大騒ぎやつた」

私は若い学生たちのだらけきつた雑談を部屋の片隅でかかされた。みんな彼等は原子爆

弾の際は中学の勤労隊にゐて市街から離れてゐたため無事だつたのだ。それは惨劇に直面し、その後突おとされた悲境のなかに生き喘いでゐる私とはひどく違ふ世界だつた。学校はもう休暇になつてゐたが甥たちはなかなか帰郷しさうになかつた。毎日、彼等は七輪で米を煮いてはガヤガヤと食事をしてゐた。食事の時刻には私は部屋を出て外食食堂に行つた。それから夜は壁際の片隅に身を縮めて寝た。私は何処かへ突抜けてゆきたいやうな心の疼きで一杯だつた。甥が帰郷すると始めて私はその部屋で久振りに解放されたやうな気持がした。が、ある朝、新聞記者が訪ねて来ると、「唐突な質問で恐縮ですが世態調査で伺ひたいのです」と先日の求間広告で申込があつたかどうか訊ねた。私は「求間独身英語家庭教師に応ず」の広告が既に二週間前新聞に掲載されてゐたのもまだ知つてゐなかつた。

35. 三好達治「銀座街頭」(1950、S.25)に見る「老舗が屋根に付けるのを似つかわしくないという人もいる広告灯」

私は茫然として、横長い窓をスクリーンのやうに眺めてゐた。群衆といふものは、ただとりとめもないもののやうだが、眺めてゐるとそれがどうやら一刷毛一刷毛一つのたしかかな運命を、或は私のために一つの幻影を描き上げてゆくやうにも見えてくる。たとへば一箇の折靴がゆく。立派な新品だが、本来意志的なその品物が、案外風に吹かれる糸瓜のやうにぶらついてゆく。あとから裾さばきの軽い外套をハイヒールが運んでゆく、歩度は急、颯爽、即ち颯爽がゆくのである。ジャンパーは思案顔だ、苦が味ばしつた美男子である。それがつまらぬ流眇(りうべん)は不用意だつた。女事務員二人、年中無休のおしやべり。お次は完全な暇潰し、縵綴自慢、歩度は緩。かうして眺めてゐると、この種の自慢の鼻つばしは、案外その数が多い。新聞を読みながら地下鉄へ降りてゆくのは、押出しは立派だが、とんと見当のつきかねる人物だ、革手袋、かうもり、歩度緩、さて何が何だか。分別臭い禿げ頭は、恐らく二昔前の親父そつくりなんだらう。ベレは地下鉄へ駆け降りた、新聞社の給仕だらう。赤ちやんを負ぶつた搔卷から、スカートがちらちら、これは最近の流行だ。——かうして私の眺めてゐるのは、しきりに交替する無言の表情と雑多な服装、その歩(あし)早やな筋立のないフィルムだが、筋立はなくともどうやら一つの輪郭を、漠然とした意味をそれらが暗示しようとするから妙だ。暗示は受取り手の考へ次第の幻影だが、幻影にしたつて一つの現実だらうではないか、虚空に浮ぶ虹だつて定まつた角度にし

か見えぬ。

私は何を見てゐるのだらう。硝子の上を滑つてゆく人影のむかう、電車線路を隔てたむかうには露店の背中がならんでゐる。だんだら染めの揃ひの背中が隙間もなしにつらなつてゐる。そのお揃ひの幔幕のほかの部分、屋根も軒端も風除けも、これはお揃ひの天幕である。天幕は同じ色目、同じ布地、同じ寸法のものである。軍隊で行軍用に携帯してみた天幕が、こんなところに流れ寄るやうに落合つて幕舎を張つてゐるのである。軍国主義の形見といへば正にさうだ。それらが隙間もなしにぎつしりのべつに連つてゐるのは、露店の世界も人口過剰の証拠である。以前はもう少しゆとりがあつた。その頃は市街も唯今よりは余ほど立派であつたが、市街の美観を害するなどとはいはれなかつた。それがそこらの建築は遥かに安つぱく貧弱にけばけばしくなつた唯今、反つてその美観を害することになつた。もしかするとあの天幕が禍をなしたのかもしれない。

敗戦色といへば、あの古天幕にくるまつた露店はたしかにその一つだ。その天幕の向うに見える鳩居堂の屋根に、何がランプの広告灯ののつかつてゐるのなんかも、さういへばその一つだらうか。名だたる老舗が広告灯をいただくことになつたところで私はそれを揶揄ふつもりはない。時勢はそんな屋上よりも地上の歩道で、もつと激しく混沌とこんがらかつてゐるからである

36. 三好十郎「清水幾太郎さんへの手紙」(1953、S.28)に見る「むきになるのが非常識な書籍の帯の推薦(広告)用の文章」

その本の表紙の帯紙に、あなたは「朝鮮戦乱勃発のその日から、私は(何かかくされている)という疑惑に悩まされつづけてきた。だが私の疑惑は正しかった。(中略)この本を読んで目がさめないものを白痴というのであろう」と書いていられます。そのことなのです。たかが帯紙に印刷されたスイセン文をトッコにして、あげ足を取ろうとしているようにとられては困ります。私にしましても「帯屋」だとか「チンドン屋」などという言葉があることは知ってしまして、広告用の文章にたいしてそうムキになるのは非常識なことは承知しているのです。しかし、いくらそういう場所であっても、あなたが無責任なことを書かれるはずはないと思ひました。

それに、ご文章の調子も烈しく、決定的だったし、かりにもこれを「チンドン屋の文句」に似たようなものとしてかろく見すごすことができませんでした。つまり、かねて評論家としてのあなたのご発言を、私がかんがりの程度まで信頼しているがゆえにしたことですか

ら、あなたは許してくださらないはいけません。それに人間はだれでも、十分に準備し慎重に打ちだした大論文などよりも、割に不用意にヒョイともらした片言や小文章の中に、ホントの意見や姿を示すこともあることを知っているために、このようなものを割に重要視する習慣を私はもっているのです。

37. 北大路魯山人「欧米料理と日本」(1954、S.29)に見る「古本や食器を集めるために自分で出すつもりのパリの新聞広告」

四月上旬(注・昭和二十九年)には日本を発(た)って、アメリカからヨーロッパを回ってくる予定で、いま準備中である。自作陶芸の展示会を欧州各地で開き、文化交流のために一役買って出るといのが一応の目的になっているが、ヨーロッパ旅行の魅力は本場フランス料理、イタリア料理、ベルギー料理などをつぶさに吟味して来るということにある。

パリに着いたら、新聞に広告でもして、料理に関する古本や食器など集めてみたいと思っている。

若干の考察(備忘)

今回対象とした資料類についても(前稿、前々稿も同じであるが)、読み手と書き手が主観的にせよ感じた「同時代性」があったと仮定すれば、それ抜きに、平成28年という現時点でそれを読まなければならない、という限界が観察を行いつつも頭から離れない作業であった。「尋ね人」「人探し」といった広告目的・広告行為は読み取れるとしても、それを支える様々な装置や常識、とりわけ「新聞の読者の質量」、また「新聞に載ることの特殊な影響力」やその周囲の「実際の耳目の集め方」、さらには「関係者の期待」など「記録には直接現れない意味」は想像する他はない。

とりわけ、現時点では、広告として「立ち上がってくる」あるいは「忍び込んでくる」様態・状況も変化が激しい。北田(2000)が「気散じ」と呼び、広告がわれわれの意識に侵入するマイクロな理解を示したことも、LINEやツイッター、またキュレーションと呼ばれる「ニュース配信」などがスマホから侵入することで、不連続な認識になる。つまり、2000年時点で「連続した広告との出会い」を、明治期の新聞読者に対して類推・解釈しようとした北田の作業も、現時点ではその「類推・解釈」が、難しくなっている可能性があるのである。

しかし、典拠文献にいくばくかづつでもあたることで、その理解のための数多くの補助線を引くことになって、その読み取って行く「意味への想像」の確からしさや説得性を少しづつでも高めるであろう。その期待がまったくなくなれば、こういった過去の文献を読むこと自体も無意味であるということとなる。そうした、匍匐前進のような種の作業を行ったのであった。

渉獵を文芸からも広げ、可能な範囲で今後も継続する。

典拠文献（番号は本文掲出順序の番号に同じ）

1. 泉鏡花（1893）『金時計』、尾崎紅葉『侠黒兒』所収付録、博文館、p.95.
2. 石川啄木（1905）『閑天地』、『岩手日報』朝刊6月22日付（1444号）1面
3. 国木田独歩（1905）『富岡先生』『独歩集』所収、近事画報社、p.43.
4. 和辻哲郎（1907）『霊的本能主義』『校友会雑誌』第172号、第一高等学校校友会、p.6.
5. 田山花袋（1909）『田舎教師』左久良書房、p.64、p.532.
6. 新渡戸稻造（1916）『アテもなく上京する婦人の末路』『婦人世界』第11巻第1号（大正5年3月号）、p.5.
7. 長田幹彦（1916）『紅屋の娘』『婦人世界』第11巻第1号（大正5年3月号）、p.30.
8. 与謝野晶子（1916）『趣味ある女の手紙の書き方』『婦人世界』第11巻第1号（大正5年3月号）、p.26.
9. 河上肇（1917）『貧乏物語』弘文堂書房、p.318.
10. スウキフト・松原至文・小林梧桐訳（1909）『ガリヴァー旅行記』昭倫社、p.142.
11. ロマン・ロオラン・豊島与志雄訳（1923）『ジャン・クリストフ 第3編』新潮社、pp.527-528.
12. 宇野浩二（1925）『質屋的主人』『文藝春秋』大正14年11月号、p.83.
13. 山本有三（1925）『広告制限』『文藝春秋』1925年1月号、pp.61-63.
14. 柳田国男（1926）『どら猫観察』『随筆』創刊号、p.43.
15. 川端康成（1927）『孤兒の感情』『伊豆の踊子』所収、金星堂、p.120.
16. 海野十三（1927）『三角形の恐怖』（『海野十三全集第一巻遺言状放送』三一書房（1990）に『『電波無線』誌昭和2年4月号初出』の記述あり）
17. 村山籐子『川へ落ちた玉ねぎさん』（『日本童話選集第三輯』丸善（1928）に『『子供之友』婦人之友社、1927年9月号初出』の記述あり）
18. アーサー・コナン・ドイル・江戸川乱歩訳（1929）『世界探偵小説全集第二巻』『シャーロック・ホームズの冒険 赤髪社』平凡社、pp.53-54.
19. 岡倉覚三・村岡博訳（1929）『茶の本』岩波書店、p.44.
20. 岸田國士（1930）『田卷安里のコーヒー』『東京朝日新聞』朝刊7月17日5頁
21. 種田山頭火（1931）『三八九日記』（大山澄太（1968）『漂泊の俳人山頭火の手記』中の年譜、p.321.に1931年出す、の記述あり）
22. 牧逸馬（1931）『世界怪奇実話全集 第二篇 運命のSOS』中央公論社所収、p.291.
23. 梶井久（1932）『臨終まで』『作品』1932年5月号（梶井基次郎追悼号）、作品社、p.6.
24. エドガア・アラン・ポー・佐々木直次郎訳（1932）『エドガア・アラン・ポー小説全集 第3巻 偷れた手紙』所収、第一書房、p.178.
25. チューホフ（1933）『頸の上のアンナ』（神西清・原卓也訳『チューホフ全集 10』（1960）中央公論社、

p.504に次の記述あり。「この巻に収めた神西清氏訳の二篇「頸の上のアンナ」「アリアドナ」は昭和8年1月刊の春陽堂版世界名作文庫『犬を連れた奥さん』に訳出されていらい初めて再録されたものである。）」

26. 武田麟太郎 (1934)『文座書林文学全集 第2』所収、文座書林、p.39.
27. 村井政善 (1934)『栄養と蕎麦料理集成——蕎麦うどん名著選集 第三巻』東京書房社、p.70.
28. 大阪圭吾 (1935)「石塚幽霊」『新青年』1935年7月号所収、p.56.
29. 九鬼周造 (1936)「外来語所感」(『九鬼周造全集第五巻』(1991) 岩波書店、p.92.書かれたのは文中の記述から昭和11年とした)
30. 小津安二郎 (1937)「車中も亦愉し」『話』1937年4月号、p.159.
31. 岩波茂雄 (1938)「岩波文庫論」(『出版人の遺文 岩波書店岩波茂雄』(1968) (非売品) p.60に初出は『東京帝国大学新聞』1938年9月19日の記述あり)
32. 加能作次郎 (1941)『乳の匂い』牧野書店、p.83.
33. 辰野隆 (1941)「パリの散策」(『辰野隆随想全集4 ふらんすとフランス人』(1983) 福武書店、p.34.『ふらんす人』1941年9月1日が初出の記述あり)
34. 原民喜 (1949)「二つの死」(『日本の原爆文学1』(1983) ほるぶ出版、p.360に『文潮』第三集、1949年7月初出の記載がある)
35. 三好達治 (1950)「銀座街頭」『藝術新潮』1950年4月号、p.111.
36. 三好十郎 (1953)「清水幾太郎さんへの手紙」『群像』1953年3月号、p.167.
37. 北大路魯山人 (1954)「欧米料理と日本」『藝術新潮』1954年3月号、p.175.

参考文献

- 伊奈正人 (2010)「動機の語彙論と知識社会学——動機付与論から『動機論の動機論』へ」『東京女子大学社会学会紀要：経済と社会』第38号、pp.1-24.
- 井上俊 (2008)「社会学と文学」『社会学評論』第59巻、第1号、pp.2-14.
- 濱田四郎 (1902)『实用広告法』東京博文館
- 北田暁大 (2000)『広告の誕生——近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店
- 西川淳司 (2008)「〈透視〉する身体——1920-30年代の日本におけるショーウィンドーの受容——」『ソシオロギス』No.32、pp.62-82.
- 西川珠代 (1991)「社会学における『動機』概念の変容——ウェーバーの動機理解と『動機の語彙』論の動機付与」『ソシオロギ』第36巻第1号、pp.63-79.
- 作田啓一 (1981)『個人主義と運命——近代小説と社会学』岩波新書
- 作田啓一・富永茂樹編 (1984)『自尊と懐疑——文芸社会学を目指して』筑摩書房
- 塩澤実信 (2002)『定本ベストセラー昭和史』展望社

—2016.6.30受稿—

